



湖月抄

教陽



湖月鈔發端條目

此物語作者事

紫式部系圖并傳居所墓所等

号紫式部事

式部廣事

物語之發起

文法

大意

物語准按

物語時代之下意

物語述作之時代

此物語故人稱義事

題号称光源氏物語事

源氏字事

源氏姓事

物語冊数事

卷々次第

諸本不同

諸抄

凡例

卷々付名事

此物語有并之卷事

源氏物語系圖

一系禪因作同年立 同作外ニアリ

源氏物語表白外ニアリ

一此物語之作者

明星抄云紫式部ハハ筆ヒト也ハハ

義也一説云父為時作之息女式部ハハ加等ハハ之由云云

大納言物語と花鳥ハハ宇治大納言物語ハハ今

ハ昔ハハ越前ハハ者時として才女として世よめとて居り

アタリ人の紫式部親なりは為時源氏ハツクリ也

こ海らり事とてとひとめよとせり事とてとて

いのまは事とてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

明星

此美人の推量ハ分女房の胸中より去出る物と

ハ見しねハ此後とてとてとてとてとてとてとて

人よめとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一 法成寺入道 御書殿也 圓白の奥書よ云。此物語世よ皆式

初う他とのそり人^{ラウビク}。老比丘等と加う所也云云

明星 これと是と自然なるもの

一 三 法説此物語越前守為時書と云。此之云云

一 明徳院御記 兼久二 少と書式部事之とのきく。又清輔

朝臣袋草紙云。故物語の弁乃入撰集のありしや

後拾遺雜一友為時奇。いれりふびとひひ一書

よりあふあふ月ととまきり。是ハ源氏物語の弁の

物よりよのりぬと思いとゆや。件^{タビ}の物語ハ世に作

也と云云 師云 古人の法説皆書式部一人の作とあそ

づとを類と強とくく

一 此物語の作者書式部勸修寺元祖良門より五代越

前守友原為時の女母ハ松尾守為信女ハスメカタ子ヨリ

明星抄 系圖

雨院尤大臣冬嗣公六男
勸修寺元祖

良門 ヨシカド 贈尤大臣正一位
お内舍人正六位上

中納言從三位

豊後守從五位下刑了六捕

利基 トシモト 贈正一位
藤原系圖尤中將云云

兼輔 カキスケ

惟正 ヨシマサ

お号堤中納言

お雅正 河因幡守

高藤 タカフジ 小一条内大臣
お寛平贈正一位
延喜御外祖
勸修寺家祖

為頼 タケヨリ 哥人

惟規 タケノリ

河明
越後寺正五位下
寺人

為時

花抄
越前寺

上東門院女房号紫式部源氏物語作者

女子

明
常陸守イ
母持津寺為信女
母右馬以敷為信女堅子
御堂園白妾云云右衛門佐宣孝室

一河海抄云紫式部ハ鷹司殿御堂園白北方一条先の官女也お繼

て上東門院ハ陪侍と先祖右ハ註と後ハ右東門院佐宣孝

ハ嫁して大貳三位弁局狭衣作者と生

一河海云式部旧詔ハ正親所以南京極西頗今の東小院

の向也此院ハ上東門院の山所乃詔也

抄上東門院彰子御事 一条院后也

御堂園白道長ハ一女母從一位倫子云云長保元

年十二月朔日入内 年十二云云同二年三月十五日立

右年十三 寛弘九年二月十四日皇太后宮寛仁二年

正月太皇太后宮万寿三年落飾為尼 号上東門

院法名清淨覺 下畧

一河海云式部墓取ハ雲林院白毫院の南ハあり小野曾

ク墓の西也宇治の宝苑日記ハと世野ハありあり

雲林院ハ淳和天皇の離宮也堅本ハ卷ハ光源氏雲林院

ハ六十六巻と云文ととを改あり一ハ式部ハ檀那

院贈僧正の件可とありありて天台一心云云親の血脉ハ

ありありて雲林院乃幽閑とありありも孝の故ありや

一紫式部と云事 清満家系紙云紫式部と云名二院

あり一ハはは物落乃中ハ若葉の巻と傳ハ甚徳ハ乃

此名とあり一ハハ一条院御乳母の云上東門院

よしそまう〜まじり〜とて吾ゆりれ志あり表と思念
とや〜まわりの史に名あり。武蔵野の表之云々 河内之

明星 雲の二りゆは武蔵野の表い〜が〜表とぞんり

河海云一部の内意上の事とぞんれと書あり〜る故よ若
式部の名とあ〜〜めて紫式アと号と〜れり 益日

一説云若式部の名幽言あり〜とて表の花乃又のゆり
よ雲の字よあ〜〜めら〜と云々 明星抄曰

明星抄云 雲日記云左衛門督公任わか〜〜こび〜こ
〜よあ紫や〜〜ぬ〜う〜ひま 源氏よ似〜人よ
〜こ〜あよ〜い〜物〜あ〜と〜わ〜り〜云々

愚案 され紫の上と〜〜わ〜書〜ゆ〜の名〜よよた
似〜り

一式部の精学廣也のち〜〜り〜〜り〜り〜り〜り〜り
と〜〜め後拾遺以後の撰集よ歌教を多入〜り。儒
学は史漢の教は物語よ〜〜り〜わ〜あ〜〜云〜り〜

河海抄云 雲式部が日記よ〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り
と〜〜あ〜〜り〜り。史記よ通〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

事の化身なり〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
徳流御記云 雲物語と始一巻後〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

此物語之發起 明星云 雲式ア上東門院よ官女
〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

くくく伺候の比上東の院へ一条院后 大新院より 選子内親王
村上天皇の宮
めつらつらり物信やわらりと而をわらりしよりつわ行り
師の古物信の目るれしれに新しく作りてとそまらる
らりし武部は修られしれにむかひらに修る進之云々
唯花抄三々
を同く

抄云選子と大新院より ニニ
ニニ 後一条院
まで武部の新院よりよりくく新院乃るあ十七年
ぬ云々

明星云河は狂とく分の上東の院乃信とくあまらり
と石山寺は修る通釈して此寺と新寺とよわらり
八月十六日の月湖水よりつりてふれとみよりつらつらに物信
の風信らりらひまれば先次しめぬのあ巻とさくく

よりこれ日依く信の巻よと表の十六日 カ
カ
一とくしつらりとくくされは石山寺に信と信向と信
らりし縁起よとまくとくくしてそは後次身よと加
くみ十四帖よかしてなつとくと権大納言行成は信書
よせられて新院のあつてせられらるは法成寺の入り園白
奥書と知れらるるは 仰 右書流の流あり

明云河海云石山寺は通釈の時物信の趣向と忘れぬ
らりしとそは信ありとる大般若の料紙と甲斐の信
て翻して信のめらるるあ巻ととくめらるは信は信障幟
梅のあまは般若一都六百巻と一巻よ自書して奉納
らりし今よの寺よあつりし此大般若のあまの裏もあま
事らるる般若と一巻よとくく信のあまのあまのあま

夷侯ありとらり

愚案 太は海抄の文に類を按翠とくわむとらり

一明星云此次之の書は源氏の左近乃事と云ふらん

西文太長言の醍醐天皇御子 冷泉院在代安和二年に

太宰帥よた過ぎしれまひの教式ア幼少よりたれ

とそつりておひ歎くは比されは光源氏とた太長よ比し

策よと式アグ君がよとて在納云菅原相のよ

と引周公且白居易古詩勸て趣向と去出とらと云

有り 愚案 是も海抄の類なり

一 文法 明星抄云先世物語の大綱法より富言ふ

は多り富云とらふいこ言とて他人の名を借るは

といつらとて法より文法の名を借りてやまひ

と記すとのやせしりとも云ふんことくは言の事

物語よとての源氏とてその実と初めはその人か

と云ふ実也されは存みり等とすのわらう例とら

より文章より一切程の文章は物よりと唐人のやめ

とらとて一切の詞記言葉は世物語より出るやう

愚案 寓寄也といふは人の名を借りてやまひ

よとせしつらとていふとて初なり

又云人の善悪を褒貶しと世物語よとて物より

丸傳と云ふり孔子の春秋と云ふとていふ善と

は後人を普通よとてみを加へるとていふ人

ありとて後生よ見たりとていふ懲とていふ

善懲惡とて是也世物語の作者は奉意是

盛者必衰會者定離生老病死有為轉變の理と云
くおめらとけうんよとて世間常住壞空の法文とて此
懺悔善提の文此物格の大意也

或抄云 稱名院也後也 如やびの莊子寓言と摸して作物格

也とてとて一事として先賢本後なる事とのまはれ作男

女の通とてりくころの周雅蝨斯の徳王道治世の始とてり

くるとれその中に如美嬀風乃とて一由なりとてとてり

の隠りりわくいやりりあし君子のつし心亦あまにあり後

人ぞてうりしめんとあり凡て仁義礼智の大綱なり佛果

善提の本源よいつらましく此物格とてりれく何の指南とてり

束めん学者活切は眼とけく魚とましくんちあまなうて

いづくよ書物そらよあしんみさりあてて公利よいさく

人の心とて女倭唐とてして物格の信とありて
の凡は男女の事とてわくころやいと歌く三四代の事と
長も男と合とわらふとのましくりかかして後述の如詩奇
のせむじこ何れつあましくめ物とてまて教とてりて

明星抄云 帝五四代年紀七十餘年の真廢と今眼お
よるるがごとくあるとりま

又云美よ不善とて人あり此物格へしとてぬ美流祀の
風也何とて仁美み考と物之とてはと是道とてりて人の

一隅の管見なり四書六経とて仁義五常とて有とてり書よ
神流祀の悪鬼とてりて是よよりて悪とてりて

人の事也尚書は朝は流るるの腔と切比干とてり賢人

の胸とさうれしるものなりびうしとくはるありとて自かよと
つよはれと毛詩又臨風とらうし戒とて世々の史漢亦
暴虐とらうとり是後人の戒なり。經教の中あり提婆
うみ途又仁王經は九百九十九のくびとらうんとせり。
又阿闍世太子の父王は慈愍を以て母と害とんとせし末
世の群生と戒りんとせり。此物結と好ま臨風の事とて
は風の事とてはたはたして世の故物とてはるれつとせられん四
書は經の人の耳よきとく仁義の心よ入るし況や女房
しこのよあよを法をさくされし人の耳よらうとて
人のぬとらうの臨風とてさうしとて。善道の媒とて中廟
のたよ入るし中道實相の悟よ入るし入つて方便は
教也

明天台一家の心四教はけり化教は法のおまじりつた
る。先化法の四教はつた
三教は 四阿含 八十誦律 五部律 一切の小乘論
定戒論の三教
さうしは後まとも不詮とて戒定慧の三法門也是小
乘也

通別 圓の三教は大乘也三大乘とて是也

愚業 是五時の説法はけり仏の教は法はよとて
化後の四教とては
漸 漸 不定 秘密
愚業 是み時の後法の別は後式を辨とては

此物結四教とてはとらうとて

愚業 是事此物結はありとてとらうとて。返而三勅

唐よハ此秦始皇ハ在襄王のよりハわくど。后下品
不韋イのつみと云後あり。是と冷泉院のよりと云り

愚案 玄宗クシノウの古さうめハ桐壺の巻よ也

一光源氏之准授 抄凡作物格のうしひをゆ迹と換とる
事一換とるど。光といふ名ハ仁明天皇の御子西三條右大臣
源光ヒコ此人と換とる。美男よつとて光と稱事ハ廣幡右
大臣ヒコ光ヒコののみ息室シメ光ヒコが將天下第一の美男よつとて光
が將と名つて是と稱とる歟

明 源光徳道兼後の人也。凡此仁り換とる
抄 法華法道より述とる。新くするハ如左大臣信ミコト公の面影
と換と

一世源氏左近の事ハ延喜廿一の皇太子西宮太皇太后の御

の例ハ公海治ありてこゝびうまひ一人ハ多明公ケシ

服ヒ前ハ源の姓と云ふ源氏の思とくれとて又さゆ母
ハ更衣周子カウイシヨウジ九ク大井源唱ヒコ也。更衣服と相似り

次ハの湯ユハ謫居テツキのよりハ行平中納言キナヒラナクナヒよと云ひてとる。謫
居の付風雨の變ありて居るよりとる。周シユと且カの東征トウセイの
よと云り。又菅通相テサウフウニ於ニ大日オホヒの事あり。源氏も
然シカ王ミコ又佐吉サキキチ立タテの事ハ相似り

好色のより在中將の風と云つて。則スな二條后ニジョウゴハ准スて為ナ云
女院メノイン二條尚侍ニジョウノウジ勝月カチツキ也。客通キヤクツウのよりと云り

帝位テイイよのりより人太上天皇ヒトタカテンノウの号ナリと云り。漢カンの
又太公望タウコウ漢の初例也。其のら日本ニッポンよハ亦モト磐イハ皇ミコよ也

愚案 磐皇イハミコよハ文武天皇ブンブテンノウの由也

高麗の桓人よ遷事。延喜皇子文彦太子とおしり
しりわり。文彦のとりり名諱ハ保明親王。ハ一りり早世
延喜の古代の前場也

愚々ちおえは後ゆく花抄の趣旨之。凡物格よいさう
よ彼是の古事の例を以て去のわたり。家物の例も
いづきの内時よりいづきいづきに時代とくけり。是世
の褒貶とくぬらん。又富々の等法也

一 此物格延喜とわけてよ。おあさる。甚原の幾くもあさ
日本の國史。日本紀より此方三代夷録よりよ。人王五十八代
元孝天皇仁和三年の八月より。のりとも。して。後國史
か。此物格とくくともよ。六代醍醐の帝より。さるん
この日本の國史よ。さるり。づん。あ。又。十九代宇。ま。ハ

帝とのぞく。延喜とくく。と。ひら。ハ。聖代。ハ。又の。明。上。ハ

是は延喜とく物とくく。是は。是。の。聖。抄。の。趣。也

細流云。孔子の春秋と。長公。と。さる。魯。の。長。公。と

周の敬王の時代よ。わ。り。り。も。後。元。明。が。周。元。王。貞。定

王の時代よ。あ。り。て。考。王。夷。烈。王。以下。の。り。と。あ。る。こと。也

御よ。司馬。温。公。の。通。鑑。と。く。く。と。時。夷。烈。王。元。二。年。より

あ。り。り。も。と。元。代。よ。さ。る。り。は。づ。と。さ。る。わ。り。也。此。物。格。と。く

の。古。代。と。あ。る。り。と。と。わ。り。り。也

一 物語述作時代 二 寛弘の始。遠之。康和の末。よ。流布と

寛弘より。康和の。百。余。年。ぐ。り。り。也。さ。る。れ。も。後。り。世。よ

り。く。わ。り。り。事。ハ。お。條。之。位。後。成。ハ。京。極。黄。門。定。家。の。代。り

と。く。く。明。回。之

一 題号 光源氏物語

弄花抄 全篇 光源氏の志れりて終

用とて仍存し細目

河成統云此物語とい必光源氏物語と号とてしつりへ
源氏と云物語教あつの中に光源氏物語ハ紫式部が作と
云云是今案の義也紫式部寛弘六年の日記に源氏物
語の内前よあつと云せり又あ後よも紫式部
源氏物語と云り代々の集乃何是日也かど。奥入りも是
らり先源氏物語と云物なりあつては之と云まど加へ
りみづぐは類多れば源氏と云まもるるしつり
源

一 源字 抄荀子註根字也 愚云韻書水之本也

細流云古今序山下水のこもといふかこも水の源

と云るなり。岷江初監觴入楚乃在庭 山谷外四谷 州事

ぐくく。是ハ女のこもるるも其ハ源と
るるあり。凡法抄亦記たり。仍畧之

氏字 正義云氏猶家 釈例云別而執之曰氏合而言
之曰族

一 源氏姓 抄源字ハ監觴小水為九河之源の義も後

して用るは此物語も如此

河海之源姓始干嵯峨内子信公

抄是ハ嵯峨天皇弘仁五年ニ男女皇子三十余人居て
源氏の姓と下されり始るも前ハ源氏の姓あること
其前ハ皇子も凡人もさうして久々の姓がわかれ
也源の姓があきてくハ皇子の別乃姓よりするは

なり。それゆへは帝王のゆゑに下より上と一せし源氏と云。親王宣下われ親王也。下下より上何の事。又親王の下の下より上と二世の源氏と云。天子の孫也。

一 此物語冊教 貞徳云 天台六十卷よりなりて源氏六十

帖よりなり。その中より并の巻ありて十八帖よりなり。是と法華經十八品の數と。天台六十卷と云は、

玄義十卷 天台大師作 法華題目註也 釋藏十卷 妙樂大師作 釈玄義

文句十卷 天台作一部ハ 軸文ニ句ヲ釈也 疏記十卷 妙樂作 釈文句

摩訶止觀十卷 天台作大 意ヲ釈ス 弘法十卷 妙樂作 釈止觀

十巻づつ六部に於合六十巻と。今の物語ハ二重源の巻と云。源氏の源と云ふ事其名づらりて。并のよ占ともり。つとふ十四帖より終り。はた天台六十巻と止觀を

十巻のうら三巻をとり。もふあり。加之周禮の六帖は句冬宮より大學格物の篇と不足あり。は例に多し。

一 卷々之次第 三 依司馬遷史記

本紀十二卷 自桐壺至白宮

世家三十卷 以宇治十帖比之

列傳七十卷 以並擬之

一 此物語諸本不同事 明九一切の文章より書中書 清書の三あり。又展轉書寫の誤勝少へ。況大部の物語書生の失滑勿論の事也。

抄石山あり。次第の巻より書始。はつと。とらへて。十四帖よりなり。と。權大納言行成は清書させられ。て。大衆院へあられ。は法成寺入通。園白。山堂殿也。奥事と

加へられて之は物終世にんか式アウ他よのこさつり老比立
等とらそつり変え云云

愚云河海抄は信本叔重らりまり今畧

一 河内本 抄河内守源光行奉也 明以八本校合取
捨為家奉云云

愚案光行清和十代苗裔河内守大監物

抄是ハハ抄めくさ而ん現紙多く或ハ何と多り其理を
付しり後よ多くの或候いできく作さこの奉ことハ
らふらふら云云

一 表紙 明系抄中納言定家奉也

明抄物終の明人史記の巻法とるそくして同成とぬく
きく御とら知らる後生れ而およ書生の得るく一と

新しく今案を加へきと改めおらりきるはよふたを
出よのこかりして物終の本意とらりきるは定家との
表紙と云奉しり他志の本意とらりきるは定家との
意也云云

一 世物語諸抄

源氏奥入

行成は五代末孫定信子宮内權少輔從五位上
伊行之作
お定家ハ追加物終奉奥仍号之

追注加

定家卿作 愚案奥入今事とらり

水原抄

河内守光行作 河内奉註

紫明抄

光行式部丞親行才紫雲寺素寂作 河内奉註

源中秘抄 日人作源氏中秘説也

源氏論義

弘安年中論源氏物語雜考 明 伏見院東宮此由
時此事ありお 左右八人出問題ニテ条変勝負

河海抄 九卷

順徳院中三世孫四辻九大臣善成人の作也
一花ニ号ス松岩寺九府法名常勝

明 是多系の... 是尚河内方よ道と也

河海抄序

光保氏物語ハ寛弘乃始り物集て康和の末よりひろま
りて... 奥入と号し大監物光行の家への口傳と抄して水原
と名つちり... 伏見院訪よ...

時同題と名よ... 後醍醐院即位の... 万葉集と漢と... 忠守朝臣七の中... 應と... 惟光良法... び... けり... び... かと...

る眼の多し西と等古よのくはる情と名はくは
まらあり

源語秘訣 ゴヒクツニ 源氏の肉十五ヶ條の秘伝あり 同作

和秘抄 一冊 同作

年立 一卷 同作

これ中々い皆河内平氏月々善表紙と用ゝれざり
しに西三条肉府實隆公 ササタカ 号 スセツヨウ 適遠院 二条家の奇作
中奥よりいして宗祇と所傳合ありと善表紙と用ひ
まふそれよりこの世々皆流とく善表紙と用ひ
不審抄出 フシンセウ 卷 宗祇作 河花の表抄の外不審の事どもを
兼良公へ尋りたる同書也

帚木別註 一卷 同作

咲花抄 ロウクハ 八巻 抄肖拍老人 シヨウハク 逍遙院 潤色次 ジュンシキ 久我庶流

細流 サイリウ 七巻 西三条公條公 シサエ 号 キチヤ 祿名院 之作也

師伝 是書花とくく其不足と補ひ河海花
の誤とくく其可取とれ月ひ給て花伝可
河伝の或の抄よ秀あかどまふり給り云云

明星抄 七巻 西三条實澄公 ササタカ 号 ミチノ 三光院 之作云云

師伝 細流よ發端一冊と加へく兩くよ小補あり

孟津抄 七巻 九条祥岡 タチ 桂通公 キチトウ 号 トウ 東光院 之作也

貞徳老人云内外社又逍遥院殿の源氏物語は傳あり

稱名院殿よ再同より極め三光院殿よは穿鑿を
くよ及びいふと云ふ。愚業は孟津抄に海花を宗
祇別種曉花おと月ひ或の要とみて畧しくと
し。然不足の意よは注と加らる。但愚本抄写のわや
まり不^ス少^クし不^ス審^シの事ども多し。よりてそ注と
有りもの十よ三四よとて可^ク惜^シ乎

孟津抄序

光徳氏物語の寛弘のころめよいごとく康和の末よひらま
りよるるより世々の教の物語とてあつたゆゑと云はれり
と。日本の至寶万法いづれにれよらんや。とて
教の道よりみむねと一部よとて守りたりと云
は意味よりとて傳へるに。入道前太大臣の稱儀を独

岐よりよは海抄花鳥御儀のそ趣尚流よ或はお高し
或はふ叶事とてと取捨の旨よ弁花抄のそ要と云
加へてそよはれいふとて再同しゆりよ合願は
はるこのとて又事後のそ私と付ゆりたり。作は物語
のまこれとてとて黄^カ河^{キウ}九^ク曲^{キョク}と嵯^サ山^{サン}よりいづれか
よとてんとて張^{チヤウ}騫^{セン}と様^{イカタ}よ素^ソとてとてせわたりこれ杖の
よりめよ。浪河よつりて二星よ同よりとて人孟津と
昔よとてとてと云ふ。言よ亦同卦なり。げ作者
賢才のよりりたりとて仙術とて及ぶ者なり。げ一部
録一畢あり。月と日とてあれ七夕なり。則孟津
抄と名つたことありと云ふなり

凡例

一 孟津抄之源氏と云ふは地と云ふて盛者必衰の如く
 身と可見わくはていぬ色のこよいづらよきと云
 ずり故は源氏とい能智て可見云云
 一 予先年箕形ミカタノカタ如菴ニヨアム八条官ハチノエノミヤよ仕
 り此物格の講談と云ふ十
 六ヶの秘訣三ヶの口傳クハツと云ふ又先師遺傳ノコトなり
 貞徳は桐壘一卷の講尺と云ふて此物格の口傳クハツと云ふ

一 傳し此如菴老人いりて孫若院後三光院殿よりねつ
 して八条の宮乃内前ウチノマヘと云ふと講をらりされ傳しと云
 ふ知よは傳尺より細流と云ふていりてされ傳し又道権
 初は九条乃东光院のさみよと云ふいそ中よりと云
 げ物格の奥義と格めと云ふ九条大岡オホノカ幸家ユキノケ公の内前ウチノマヘよ
 ておとせしは應寺より傳しされは是は昔よ孟津抄
 と云ふみりされしよりては抄も細流孟津のあ抄と
 りしして河海花鳥カミノハナトリの要と云ふり花鳥の星と云ふ
 と云ふ交の師説と交へるりやう碎葉と云ふて
 て初心の人乃と云ふと云ふもの也
 一 此抄は河海花鳥カミノハナトリ花鳥細流明星孟津等れ能抄
 と云ふるは肩付は河花鳥細明孟と云ふり

一 九は揚格の中は載るる所の人々これ氣象行跡一家の風俗和軟の風神始終皆際々ありて而してお遠か一能くを付てそ若魚とくみ揚若とくありてそこれよあつて平生修身のありとやうく三物欲

一 卷々付名事 花九五四帖の巻は若し四ツのまあり一より相とより二より奇とより三より相と奇との二ツとより四より奇も相もとよりと名とより天台の教は四門あり一有門二空門三亦有亦空門四非有非空門也是よるぞうふと云々

愚案此巻の名は四門のふありて必彼四門のふよりかへるありて其四門の教がなりとあぞうへあつて花九帖

既ちうへに四門と云う台家よ三巻通別處の四教ともよ四門ありて十六門と云ふれ四教ともよ四門のふとあつてうり作り事繁まされ別よ記くそ品玄義八止觀六よ素密教の四門と文句四よありら又此四門の既よつらくほ氏一部の稱とい道理よありて後あり別よ記く或は四門有空亦有亦空等と空假中の三諦よありて台家不学の辟案よ必不可用者也

お右説至近年此書と見ゆ而毛詩名篇例あり世々くくわ南とくわ是師説也
毛詩正義去名篇之例不遺五
名篇之例義無定準多不遺五女絶取一或偏举兩

字^ラ或全^ク取^ル一^ク句^ヲ偏^ニ舉^グ則^シ或上^ニ或下^ニ全^ク取^ル則^シ或^ハ尽^ス或^ハ餘^ス
亦^チ有^リ捨^テ其^ノ篇^ヲ首^ヲ撮^ル章^中之^ト言^フ或^ハ後^都遺^テ見^ル文^假
外^理以^テ定^ム稱^ス

私^ニ此^ノ物^格乃^チ卷^ノ之^ノ名^是と^リと^ク准^スと^ル共^ク

毛^詩正^義去^レ名^篇之^例不^過五^一

一 纒^取

は物^格の巻^ノ名^ハ只^一之^トり^ハか^ク一^ク字^以て^シ
て名^トと^ルは^ハ准^ス

蓬^生 奇^ノ中^ニも^ハ初^メと^シ選^トと^シて^ハ生^ノ字^ハあ^らず

夢^浮橋 夏^ノの^やぶ^らり^の夢^浮橋^ノ字^ハと^クと^クて^ハ名^トと^セる

一 或^ハ偏^ニ舉^グ兩^字偏^ニ舉^グ則^シ或上^ニ或下^ニ

奇^トと^シり^テ名^トと^セる^ハ准^スと^シ又^チ奇^トと^レれ^ルも^ハ初^メの^比

づゝゝゝ

帚^木 空^蟬 葵 花^散里 湫^標

玉^鬘 御^法 幻 橋^姫 椎^本

東^屋 浮^船 心^奇と^く

若^紫 奇^ノ中^ニは^二字^ハあ^らず^一あ^れば^もあ^まま^とは

は^らづ^くと^シ

一 或^ハ全^ク取^ル一^ク句^ヲ全^ク取^ル則^シ或^ハ尽^ス或^ハ餘^ス

奇^トと^シ初^メと^シて^ハ又^チ奇^トと^シ初^メと^シて^ハあ^らず^一あ^れば^もあ^まま^とは

夕^顔 未^摘花 賢^木 須^磨 明^石

松^風 槿 心^女 初^子 虫

篝^火 若^菜上 柏^木 鈴^虫 総^角

蜻蛉 心より奇と初とをとりわたり
 園屋 心より奇と初とをとりわたり
 薄雲 奇よき初より云のうらむと
 常夏 奇よわり初よりさでことり
 胡蝶 奇よわり初より蝶とわり
 行幸 奇よわり初より幸とわり
 藤袴 奇よわり初より袴とわり
 真木柱 奇よわり初より柱とわり
 横笛 奇よわり初より笛とわり
 夕霧 奇よ夕霧とわり初より霧とわり
 紅梅 奇よ紅梅とわり初より梅とわり
 早蕨 奇よ早蕨とわり初より蕨とわり

一 寄生 奇よわり初より寄生とわり
 一 亦有捨其篇首撮章中之一言

初よりと初よりと准む

桐壺 野分 梅枝 藤裏葉

若菜下 白兵部卿宮竹川 手習

一 或復都遺見又假外理以定称

初のつぐぬと初と初とわり

紅葉賀 初の名は巻の初より他巻より紅葉賀と初より
 花宴 け巻より様の人とわり
 繪合 け巻より絵の字合の字わりはけり

又毛詩より其篇の名わりて言ふと地六篇別は初
 給の雲隠考と比と初考と注

是松風の巻よりわたり
やうめまうく東の流へもつりまやうあるゆへは細亮は横屋
の并とのまうり。横屋の并といふ末摘花の巻乃取なり。是
が巻の巻よ源氏十七巻の三月より冬すまごのまうり
ころよ末摘花の巻乃物ハ源氏十七巻の二月より。さて
横やうよといふ又あまの流乃年のまうりごとまうり聖に
やうくいふ横屋とまうりといふく。遠生の巻と細亮の心
やうれいぬみなり。又白宮の并。紅梅竹川の二巻ハ入神様
堂をまうり并あうく。年紀混雜のまうりあり。ゆる古人
の古抄といふ紅梅ハ紅梅大納言の列傳竹川ハ竹川のたふ
はの列傳とまうりといふまうり。まうり之巻端引く
又作く

物語并之例 ほんごうの物語よ中三の巻春日巻又

中よ吹上の巻並糸の使菊の巻まうりてあり。又と
松の物語といふ物あも並一帖あり。是亦の例なり

三史記列傳七十卷 以並敷之云云前二巻



